



Good News for Japan とぎのこえ

平成二十七年二月一日発行
昭和二十二年一月二十四日(第二種郵便物認可)

明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行

あなたの立ち位置はどこに

久郷 フミ子



長く続けていた仕事を退いた時、わたしは、自分の立ち位置がどこにあるのか戸惑いました。例えば、電話をかける時「○○の○○です」と言える立場ではないことに気付き、働きを離れた現実を突きつけられた思いをしました。

昨年、テニスの錦織圭選手の活躍が話題となりました。全米オープン男子シングルス準決勝で、世界ランキング一位のノバク・

ジョコビッチ選手を破った試合では、二人の「立ち位置」の違いが勝敗を分けたと言われています。

ベースラインから二・五メートル下がっていたジョコビッチ選手に対して、錦織選手は、ほぼベースライン上であったそうです。これが動き回る距離の差になり、一ポイント取るために動いた距離は錦織選手の八・四二メートルに対してジョコビッチ選手は一〇・四二メートルだったとのこと。

ベースラインぎりぎりから素早く打ち返ってくるボールにジョコビッチ選手は戸惑い、消耗度も違っていたようです。錦織選手の「立ち位置」が、彼を勝利に導いたと評価されています。

わたしたちは、「立ち位置」などあまり気にしないで生活しています。「立ち位置」とは、「周囲の状況の中でその人が取る立場」、「ポジション」ということで、「当人の意志」によってどのようなも変えることができるものでもあります。

あなたは、人生の「立ち位置」をどこに置いていますか。

主イエスは、岩を土台にした家と砂を土台にした家を比べた譬えで「雨が降り、川があふれ、風が各々

の家を襲った時、岩を土台とした家は倒れず、砂を土台とした家は倒れて、その倒れ方はひどかった」と話しました。「家」は、私たちの生き方を示し、自然の猛威は、人生の様々な経験を警えています。

ここでイエスは、私たちが人生の土台に寄って立つ「立ち位置」をどこに置るかかと問うているのです。

人が立つべき、確かな「立ち位置」は、天地を創造された真の神様とイエス・キリストの十字架による罪の赦しと救いの上にあります。聖書は示しています。

「わたしたちも皆……肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していた……者でした。しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいったわたしたちをキリストと共に生かし……てくださいました。」(エフェソの信徒への手紙2章3〜6節)

神様を避け、罪に陥り、滅びに向かう人間を憐れま

た神様は、ひとり子イエス様の十字架の死によって人間に救いの道を与えてくださいました。

イエス様を信じ、神様に「立ち位置」を置く時、次の歌のような心の安らぎを得ることが出来ます。

主の十字架を仰ぎしとき
罪の重荷は去れり
主の十字架仰ぎしとき
神と和らぎたり

(救世軍歌集)

聖書は続けています。

「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるようにな。」(エフェソの信徒への手紙3章16、17節)

「当人の意志」によって変えることのできる「立ち位置」を神様に置き、この祈りが、あなたのものとなりますよう、心から願っております。

(救世軍士官(伝道者))

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

〈信仰の体験談〉

神様を信じて歩む人生、 ただ感謝のみ



杉本 勝義

「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」

これは、新約聖書のペトロの手紙二 三章八節の言葉です。現在七十一歳、救世軍に属しては五十一歳の私が実感していることです。神様を信じて歩む人生は、感謝と喜びに溢れた日々です。

教会に導かれて

私は二十歳の時に、イエス・キリストの救いに気づきました。きっかけは、勤務先のクリスチャンの社長の勧めで、社長が属しているキリスト教会に行ったことです。

初めて教会の礼拝に行った日、ちょうど洗礼式がおこなわれました。洗礼を受ける女性は緊張していたようですが、その顔は気品に満ち、輝いていました。とても感動したことを今でも覚えています。しかし、その時は、続けて教会に行くことはありませんでした。

救世軍との出会い

当時は、東京オリンピックで日本中が湧いていた時でした。そんなある日、仕

事帰りに自宅近くの街角で、赤い提灯を下げて、ラッパを吹き、太鼓をたたいている一団に出会いました。救世軍の屋外集会でした。伝道のパンフレットを手渡されました。しかし、それを見ることはなく、カバンに入れたままでした。

何日間か過ぎた土曜日、テレビで野球中継を見ていた時、以前、洗礼式で見た輝いた女性の顔が浮かんできました。すると突然、「これからの人生、自分はこのままでもいいのか」との思いに駆られたのです。そして、「明日は教会に行つてみよう」と、カバンに入れたまま、まだつたパンフレットを取り出しました。そこには

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」
(使徒言行録16章31節)

という言葉と、救世軍西新井小隊(教会にあたる)の住所が書いてありました。家の近くでもあり、ここに行くことにしました。



西新井小隊

その罪を取り除くために、神の御子イエス・キリストが人間の身代わりに十字架に架かっ

私は「罪人?」

西新井小隊に行くようになって、最初にぶつかったのが「罪人」という言葉でした。私は、真面目に生きてきましたので、どういふことかわかりませんでした。小隊長(牧師にあたる)は、最初の間アダムとエバが神様に背いたために、人間すべてに「罪」が入ったこと、そして、

神様を信じないで、自分勝手に生きることが「罪」であることを知りました。その後、イエス・キリストの贖いの十字架は私のためであることを信じ、他の信徒の方たちの祈りに支えられて、兵士入隊(正式に救世軍の信徒となること)をいたしました。

「赤い提灯——一八九五年に救世軍の働きが日本で始められて以来、三十年前くらいまで、よく屋外集会で用いられていたものです。赤い地に「神は愛なり」と書かれており、今日ほど街灯が普及していなかった街角で、信徒たちが持つ赤い提灯は人目を引きました。ラッパと太鼓——救世軍ではグラスバンド(英国式金管バンド)が盛んです。立つても、歩きながらも演奏できるグラスバンドによって、



どこへでも出て行き、神様をほめたたえることができるからです。

その昔、救世軍に反対する人々の前でラッパを吹いたところ、妨害の騒ぎを圧倒し、より多くの人々を惹きつけたことから、ラッパや太鼓を用いて伝道活動を推し進めるようになりました。今日も、伝道者や信徒たちは積極的にラッパを練習し、屋内外を問わず、演奏や伴奏で神様の愛を伝えています。



てくださったことを教えてくださいました。

「この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもないから。」
(伝道者の書7章20節 新改訳聖書)

試練

二十四歳の時、アメリカの牧師で、世界的に有名な伝道者ビリー・グラハムという人が来日し、大きなキリスト教の伝道集会がおこなわれました。私も小隊の信徒たちと一緒に出席し、大きなお恵みをいただきました。

ところが、その翌日、勤務先で事故に遭い、右手の二指を失ってしまいました。大きなショックを受けました。神様を賛美するためにラップを練習していたので、吹けなくなったことがとても悲しかったです。

二十六歳になった時、父が病で倒れ、銀行からの借入金を残して他界しました。母も、父の看護疲れがもとで、後を追うように世を去りました。深い喪失感の中で、父母とも小隊で、キリスト教式の葬儀をおこなえたことが慰めでした。

家族

三十歳の時、家内と結婚しました。彼女は、北海道で保母をしながら、聖公会の教会で信仰生活を送っていました。母が入院中、彼女が母に見舞いの便りを書く

れたのが縁となって、結婚に導かれました。家内は私と共に救世軍で信仰を守って活動し、家庭を守ってくれています。

「良い妻を見つける者は幸せを見つけ、主からの恵みをいただく。」

(箴言18章22節 新改訳聖書)

家内は、現在、四人の娘の母、五人の孫の祖母となっています。神様が私に与えてくださった温かい家族です。

結婚して十三年目、二十三年間勤めた会社を辞めることになりました。会社と意見が違ったことが原因でした。娘たちも育ちざかりの時で、家内の苦勞を思うと心が痛みました。

退職して一週間後、一本の電話が家にかかってきました。会社の得意先の社長からで、我が社で働いてほしい、との内容でした。本当にホッとしました。



家内と



娘たち家族

ました。家庭の心配もなくなり、娘たちにも笑顔が戻りました。収入も以前より多くなり、家族で神様に感謝を献げました。

新しい歩み

得意先の会社に移って、六十五歳まで、責任ある立場で働かせていただきました。定年後、これからは、自分の時間を大切にしたいと考えていたのですが、新光館という、救世軍の緊急宿泊施設から話があつて、そこで週三日勤務することになりました。

その施設は、いろいろな事情を抱えている利用者の方々の必要に応え、自立のためのお手伝いをする所で、

祈りのうちに運営されています。

ここでは、月一回、「聖書とお茶の集い」が開かれており、利用者の方だけでなく、退所された方も加わり、肩の凝らない和やかな時を過ごしています。この中から、近くの救世軍の小隊に出席している方も何人かいらつしゃいます。これから、どのくらいこの新光館でご奉仕できるかわかりませんが、祈りつつ託された働きを進めていきたいと思っています。

ただ感謝のみ

若い日にイエス・キリストの救いにあずかり、神様の憐れみのうちに、今まで生かされてきました。救世軍を通してたくさんの方々と良い出会いをし、人生の山坂も、聖書の言葉と、信仰を同じくする方々の祈りに支えられて、乗り越えることができました。残る人生、神様の御心を痛めないよう、歩んでいきたいと思っています。

(西新井小隊(教会)所属)



社会鍋募金のボランティア

あなたに伝えたい聖書の言葉

初めに、神は天地を創造された。(創世記1章1節)
神は御自分にかたどって人を創造された。…男と女に創造された。(創世記1章27節)

このようになわけて、一人の人(編集注・アダム)によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。(ローマの信徒への手紙5章12節)

神は愛です。(ヨハネの手紙一 4章16節)

神は、その独り子(編集注・イエス・キリスト)をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネによる福音書3章16節)

イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。(ヨハネの手紙一 3章16節)

罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。(ローマの信徒への手紙6章23節)

- 私の近くの救世軍を紹介してください。
- キリスト教についてもっと知りたいです。
- 「ときのかえ」の購読を申し込みます。

ご氏名

ご住所

裏、この部分を封書か葉書に貼り、面下の救世軍にお送りください。

